

二〇二四年度入学試験問題 (第一回)

国語 (五十分)

【注意】 一 この試験の問題文・設問は、1ページから16ページに印刷されています。

二 解答は、すべて別の「解答用紙」に記入しなさい。

三 文字は、正しくきちんと書きなさい。

四 、。。「」はそれぞれ一字と考えなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

姉がこの部屋に来たのはいつが最後だっただろう。ああ、そうだ、四月の、お釈迦様の誕生日だ。小学生のとき、私が世界で一番美味しいと言った洋菓子タカギの生チョコタルトを手土産にやって来た。

『生チョコタルト、甘ったるいって何度も言ったじゃん』
 かつては濃厚な甘さとタルトのさくつとした食感にうっとりしたもののだけけど、お酒を飲むようになってから甘さがくどく感じられるようになった。しかもタカギのケーキはちよつとダサイ。昭和でセンスが止まっている感じ。艶々のチョコクリームにたつぷり散らされたアラザンは、当時はおしゃれだと言われたのかもしれないけど、食感を悪くしてるだけだということにそろそろ気付いてほしいと思う。

なのに、姉は馬鹿の一つ覚えみたいに生チョコタルトしか買ってこない。しかも必ずホール。生チョコタルトは5号サイズしかないの、ふたりで食べるにはあまりに大きい。

『あら。美弥ちゃんは、大人になったらぜーんぶひとりで

食べるんだって言ってたじゃない』

『小学生のころの話でしょ。この年になるとただただ重いんだってば』

『またそんなことを言う』

私の部屋のキッチンなのに、我が家のような立ち居振る舞いで、姉はタルトとコーヒーの支度をやる。四分の一寸切り分けられたタルトとブラックコーヒーが、ダイニングテーブルに座っている私の前に置かれた。向かい側の姉の席は、同じサイズのタルトとカフェオレ。姉は甘党なのだ。このタルトだって、姉が食べただけかもしれない。

『でかいんだけど』

『そんなことないでしょ』

姉は大きな口でタルトを食べ、カフェオレで飲み下す。五口くらいでタルトが消える。湯気を立てていたカフェオレも、あつという間になくなった。私はそれを見て『相変わらずクジラ……』と小さく独り言ちた。

(中略)

『何？ 何か言った、美弥ちゃん』

小さな声を聞きつけた姉が軽く睨んできて、『いや別に』と答える。

『相変わらず食べるの早くなって感心しただけ』

『ふん。あなたはぞんぶんにゆーっくり味わいなさい』

それから、姉は勝手に部屋中の掃除を始めた。これも、いつものことだ。

タルトの上のアラザンをつつく私を尻目に、姉はくるくる動く。窓を拭き、床を磨く。それでいて、『もつとこまめに冷蔵庫の中の整理をしないと』とか『洗濯機の裏から靴下が三足分も出てきた』とか文句を言ってくる。『こんなことじゃいつまで経っても結婚できないよ』とも。

(中略)

『お姉ちゃん、もう帰りなよ。そういうところウザいんだよ。ウザ女王だよ。私さあ、もう二十四だよ？ いつまで私の親気取りでいるわけ？ 私のことに構わず、もう自分の家庭だけ守ってなよ。何ならお姉ちゃんこそ子どもを産んでさ。その子の世話を好きにだけやるといいよ。そうすれば、私のことなんてどうでもよくなるんじゃない？ 早くそうなってよ、まじでウザいから』

これも、いつものやり取りだ。姉がキレて、次に私が逆ギレする。

母親のいない家庭だったから、姉は私の母親代わりとし

て頑張っていたのだと思う。父が何でもこなせる万能なひとだったこともあるけれど、父子家庭ゆえの不便はさほど感じたことがない。他の母親たちより断然若い姉が誇らしかった時期すらある。

けれど、姉は姉に過ぎず、母親ではない。いつしか、親でもないくせにと姉を疎ましく思うようになっていった。そもそも、姉は過干渉すぎた。父が亡くなってからそれは酷くなり、私は高校を卒業するまで門限が十九時だった。門限を過ぎれば姉からの着信とメッセージが止まらず、帰宅すれば小一時間説教され、泣かれた。高校卒業を機に家を出れば、週に何度もやってきては世話を焼かれた。彼氏ができれば必ず紹介しなくてはいけなかったし、同棲は姉の許可を得ないといけなかったから同棲もどきだった。成長すればするほど、姉にうんざりする気持ちも膨らんだ。

姉が、大袈裟に眉を下げる。

『そんな悲しいこと言わないで。もし仮に子どもを産んだって、美弥ちゃんに対する感情は変わんないよ』

『嘘だね。自分の子どもの方が絶対大事になるよ。私は、^Cその方が助かる』

タルトをばくりと食べて、甘さに顔を擰める。ブラック

コーヒーで無理やり飲み下して、『私はいまの生き方がいいんだよ』と言った。

『後悔したつていいよ。その覚悟で、いまの状況を選んでいるんだから。ほら、ウザ女王はもう帰って。あ、タルトの残り持って帰ってね』

ああ、そうか。生きている姉と触れ合ったのは、あの日が最後なんだ。喧嘩別れしてからずっと会わずにいて、したら姉が入院や手術をし、お見舞いにも行けなかった。

「後悔、かあ」

無意識に、言葉が口から零れ落ちた。こんな後悔は、覚悟していない。姉と気まづいまま永遠の別れが訪れるなんて、どうして想像できるだろう。

(中略)

和史さんの自宅待機期間が終わるのを待って、私は茜ちゃんと一緒に姉夫婦の家を訪ねた。ふたりは父の遺してくれた一軒家に住んでいたから、実家でもある。

「ここに来て、もう香弥はいないんだね」

玄関先に立った茜ちゃんが、正視できないといったように俯いた。待ち合わせ場所についたときから、彼女は泣き腫らした顔をしていた。勤務先のフラワーショップで自

ら作ってきたという花束を片手に抱いている。姉の好きな百合が豊かに香っているのが、隣にいる私にもわかる。

中に入ると、父の遺影が見守る和室に簡易祭壇が設えられていた。去年のお正月に撮った写真が、姉の遺影に使われていた。

「あ。これあたしが撮ったやつ」

茜ちゃんが言う。切り取られてしまっているが、満面の笑みを浮かべている姉の両脇には、和史さんと愛想笑いしている私がいる。私はすっぴんで、だから写りたくないと言ったのに、姉が『こういうときくらい、いいじゃない！』とごねたのだ。

『お年玉あげるから、一緒に写ってよ、お願い』

両手を合わせてお願いされて、そこまですることじやないでしょう、と渋々頷いた。今度から、私がちゃんと化粧してるときにしてよね。

あのとときはまだ世の中が大きな変化を迎えるなんて想像もつかなかつたな、と思う。姉がいなくなってしまう、なんてことは、なおのこと。

線香の匂いが鼻を擽る。祭壇周りを見回せば、様々なものが供えられていた。華やかな花籠に、ぬいぐるみ。結

婚式のときの写真もあれば、茜ちゃんとのツーショット写真もある。和史さんが精一杯、姉の周りを華やかにしようと試みたことが伝わってくる。

仏飯の横には、アラザンが散った生チョコタルトもあった。大きく切り分けられたタルトは、今朝にでも供えられたのだろうか。表面がまだ艶々している。

「こんな風にしても、全然現実味がないんだよね」

声がして、振り返る。お盆にガラス製の茶器を載せた和史さんが立っていた。

「言い方は悪いけど、ままごとでもしてる気分だ。ああ、ふたりとも、こっちへどうぞ。お茶でも」

続き間の下の間を示されて、移動する。父が気に入っていた黒檀*こくたんのテーブルに、私たちと和史さんは向かい合わせに座った。和史さんの背中越しに、姉が見える。茜ちゃんがティッシュを取り出して涙をかんた。

「まあどうぞ」

大きな体軀たいくのひとが、一回りも二回りも小さく頼りなくみえる。私たちの前に、冷茶と生チョコタルトが一切れずつ供きょうされた。

「ままごとの気分で、迷子になった気分でもある。香弥は

ほんとうはどこかにいて、おれがはぐれてしまったのかなって。おれの方がおかしいのかな、ってさ」

「分かる。あたしも、香弥がふらりと遊びに来そうな気がしてならないの。そんなはず、ないのにな」

ふたりがしみじみと言い、私も頷く。

いまにも、玄関の引き戸ががらりと開く音がして「ただいまあ」なんて声がるのではないだろうか。あら美弥ちゃんたち来てたの？ お夕飯食べて帰りなさい。何なら泊まっっていく？ 美弥ちゃんと茜、同じ部屋でいいよね。なんてことを言っけて入って来て、この祭壇を見て「趣味が悪い悪戯いたずらね！」と顔を顰めるのだ。

「こないだ、美弥ちゃんがこれは夢ですか？ っておれに訊いただろ。あれ、よく分かるよ。夜中に目が覚めて、いますごく怖い夢を見たんだよ、香弥が死んだなんてあんまりに酷い夢って隣に声をかけて、ぞっとするんだ。ああ、夢じゃなかったんだって」

ばかだよな、と力なく笑う和史さんに「そうなんですよね」と相槌あいづちを打つ。

「LINEの通知が来ると、姉かなって思うんです。この間は街中で、姉を見かけた気がして追いかけてきました。

もちろん、違^{ちが}うんですけど」

はつきりとした別れを経^へていないから、現実についていけない。世界から切り離^{はな}されたのは、ほんとうは私なんじゃないかと思う。

「まあ、食べなさい」

和史さんが、姉のような口ぶりでタルトを示す。

「これ、祭壇にも供えられていましたね」

姉がいなくなった後もこのタルトを食べるのか。小さく笑^Eってフォークで切り分ける。口に運ぶと、相変わらずの甘さが広がった。

「これ、お気に入りだったからね。おれも、ずいぶんこ相伴しよばんにあずかったもんさ」

「うちに来るといってもこれを持ってきて、でも美弥ちゃんが好きだからって言い訳してました」

やっぱり、姉の好物だったのだ。小さく笑うと、茜ちゃんが「え？ 違うよ」と言った。

「これ、美弥ちゃんが初めて香弥にプレゼントしたタルトじゃん」

茜ちゃんの言葉に、二口目を頬張^{ほおば}っていた私は「ふお？」と声を漏^もらした。首を傾^かげると「覚えてないの？」と呆^{あき}れ

た顔を向けられる。

「美弥ちゃんが小学校六年生で、香弥が十九のとき。美弥ちゃんが、誕生日プレゼントに買ってきてくれたやつじゃん。世界で一番美味しいタルト、独^{ひと}り占^じめしていいよって言われたって、香弥大喜びしてさ。あたし、そのときの写真、なんべんも見せられたよ」

思い出した。姉が大人になる前に世界で一番美味しいタルトを独り占めさせてあげたくて、私はお小遣^{こづか}いを貯^ためて生チョコタルトを買おうとした。でも六百円くらい足りなくて、そしたら父がこっそりお金をカンパ^{*}してくれた。年の数だけろうそくを付けてもらって、大事に抱えて帰った。夕飯のあと、父と協力して歌を歌いながらタルトを出した。驚^{おどろ}いてほしいなどは思ったけれど、姉は大げさだと呆^{あき}れてしまうくらいわんわん泣いた。火をつけたろうそくが溶け切ってしまうんじゃないかというくらい、泣いた。それから浮腫^{むく}んだ目をしょぼしょぼさせて、ホールのタルトを食べる姉に、私は何度も『美味しい？』と訊いた。姉は確か、『すごく美味しい』と答えた。あたしも、世界で一番美味しいタルトだと思うよ、美弥ちゃん。その顔がとてもやさしくて、可愛^{かわい}くて、だから私はニコニコと笑った。

ああ、そうか。そういうことだったか。

^F 私がすっかり忘れていたことを、姉は大事に抱え続けてくれていたのか。

初めて、涙が出た。

いままで滲みもしなかった涙が、ほろほろと溢れた。

何で忘れていたんだろう。何で、話さなかったんだろう。

お姉ちゃんの方が、生チョコタルト好きなんじゃん。私が好きだからとか言っつて、ほんとうは自分が食べたいだけじゃん？ たったそれだけのことを言っつていけば、何か変わっていったはずなのに。こんな風には知ることには、なかったのに。

「香弥は、美弥ちゃんが大好きだったからなあ」

和史さんが言えば、茜ちゃんが「ほんとうに」と返す。

お父さんが亡くなつて絶望していたとき、美弥がぎゅっと縋りついてきてくれたから頑張れたつて言っつた。美弥がいるから頑張れるつて。あたし、きょうだいがいないからそれがすごく羨ましかった。喧嘩しあつててもしあわせ

そうふたりを見るのが、好きだった……。

両手で顔を覆つて、溢れるままに涙を流す。お姉ちゃん、お姉ちゃん。たったひとりの私のお姉ちゃん。好きだったのに。傍に居るのが当たり前で、言わなくなつたつて大丈夫だつて思つた。でも、違つたね。ごめんね、ごめんなさい。

泣きながら、生チョコタルトを食べる。アラザンが、しゃりしゃり鳴る。濃くて甘つたるい。でも、特別な味がした。

(町田そのこ「赤はこれからも」による)

【注】

*アラザン——銀色の粒状をした甘みのある糖衣菓子。

*過干渉——意見や指示をしすぎる事。

*茜ちゃん——香弥の親友。

*黒檀——黒くて堅い木材。

*ご相伴にあずかる——一緒にもてなしを受ける。

*カンパして——(お金を)出して。

問一 — 線部 A 「馬鹿の一つ覚え」とあるが、ここではどのようなことを「馬鹿の一つ覚え」といつているのか。説明として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 甘党でたくさん食べたい姉は、タルトはホールの5号サイズが一番食べ応えがあると思っていること。

イ 小学生だった妹が世界で一番美味しいと言ったため、これをあげておけば妹は喜ぶと姉は思っていること。

ウ 洋菓子タカギの生チョコタルトは、クリームが艶々でアラザンが乗っていておしゃれだと思っていること。

エ 大人になったらゼーンぶひとりで食べると言った妹の願いを叶^{かな}えるため、手土産にすべきだと思っていること。

問二 — 線部 B 「相変わらずクジラ……」とあるが、これはどのようなことのとえか。説明しなさい。

問三 — 線部 C 「私は、その方が助かる」とあるが、なぜ助かるのか。「その方」の内容を明らかにして、説明しなさい。

問四 — 線部 D 「こんな風にしても、全然現実味がないんだよね」とあるが、ここで和史がいう「現実」とは何のことか。答えなさい。

問五 — 線部E「小さく笑ってフォークで切り分ける」とあるが、「小さく笑つ」たときの美弥の気持ちとして最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

A 姉の夫までが、妹の美弥ちゃんには生チョコタルトさえ出せば喜ぶ、と勘違いかんちがしていることにあきれている気持ち。

I 姉に最後に会ったときに文句を言いながら食べたことを思い出し、また食べなければならぬのかとうんざりした気持ち。

ウ 祭壇に供えてもらうほど姉が生チョコタルトを好きだったことを再確認し、姉の好物を振る舞う姉の夫を微笑ほほえましく思う気持ち。

E 姉がいなくなっても、姉と生チョコタルトはセットになっている状況が面白く、生チョコタルトを通して姉を懐なつかしく思う気持ち。

問六 — 線部F「私がすっかり忘れていたことを、姉は大事に抱え続けてくれていたのか」とあるが、「私がすっかり忘れていたこと」とは何か。説明しなさい。

問七 — 線部 G 「何か変わっていたはずなのに」とあるが、何がどう変わっていたのか。説明として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 世界一美味しい生チョコタルトを和史さんと茜ちゃんと分け合って食べる時間が、姉との思い出を噛み締めながら自分一人で食べる時間にならなくなった。

イ 甘ったるい生チョコタルトを買ってくる姉を嫌がっていた気持ちだが、茜ちゃんに羨ましがられるきょうだいの仲をもっと見せつけたいという気持ちにならなくなった。

ウ 甘党の姉が生チョコタルトを独り占めしたいと思っていたことに気づいてあげられなかった状況が、亡くなる前に思う存分食べさせて満足させてあげられる状況にならなくなった。

エ 生チョコタルトを手土産に持ってくる姉に文句を言ったり、世話を焼いてくれることをウザがったりするような自分の姉に対する態度が、姉に対して素直に接する態度にならなくなった。

問八 — 線部 H 「でも、特別な味がした」とあるが、なぜか。七十五字以内で説明しなさい。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

突然ですが、今みなさんは、山登りをしてるとします。

山頂まで半分のところ、ちょっと疲れてきました。そんな時に、「X」、半分しか登っていません」と言わ

れると、ぐったりとした気持ちになるかもしれません。ま

だまだこの先も歩かなくちゃいけないのか、と。他方で、

「Y」、半分も登りました」という言葉を聞くと、

少しだけ明るい気持ちになるかもしれません。がんばって

歩くか、と意欲も湧いてきます。

山登りなので水筒を持っています。貴重な水です。「水は、

Y 半分しかありません」と言われると、緊張や

焦りの感覚がわずかに生まれるのではないのでしょうか。他

方で、「水は、X 半分あります」という言葉を聞く

と、なんとなく安心するのではないのでしょうか。

ここからわかることは、言葉というものが私たちの感じ方や考え方に大きな影響を与えている事実です。

【1】、感じ方、考え方は、行動にも影響を与えます。

言葉、感じ方、考え方、行動。これらは連鎖的につながっ

ていきます。

私の専攻である社会学には社会構成主義という考え方が

あって、この立場では、言葉や対話が現実を創造すると考

えます。この考えですと、新しい言葉を使い、これまでと

違う方法で対話をすれば、そこから新しい現実が生まれる

ことになります。そのため、心理療法の領域にも大きな

影響を与えてきました。心理療法とは、いわば対話によつ

て人々の現実をよりよいものへと変えていく営みだから

です。

そして社会構成主義に基づく心理療法のひとつが、ナラ

ティヴ・セラピーです。一九八〇年代にセラピストのマイ

ケル・ホワイトとデビット・エプストンが提唱しました。

ところで、心理療法では、クライアレントはカウンセラー

に困り事を相談します。それはみなさんもご存知の通りで

す。

ですが「相談する相手が見つからない」というのが本書

のテーマのひとつでもあります。カウンセラーであれ誰であ

れ、相談相手がささっと見つかるのであれば、私たちだつ

て苦労しません。

というわけで、ここではまずは、自分で自分にナラティ

ヴ・セラピーができるようになることを目指します。自分

そして、ナラティヴ・セラピーの目的は、苦しみをた
らすストーリーから、自分にとって生きやすいストーリー
へと、ストーリーを書き換えることにあります。

私たちに苦しみをもたらしているのが「ドミナント・ス
トーリー」です。ドミナントとは支配的という意味です。
ここから、ドミナント・ストーリーとは、支配的なストー
リー、人々を苦しめているストーリー、人々にある行動を
とらせているストーリーを指します。

たとえば、「痩せていない自分には価値がない」、「男は
／女はこうあるべきだ」、「新卒で大企業に入社しなくちゃ
いけない」、「絶対失敗しちゃういけない」、「こんな鼻の形で
はモテない」、「遅刻は絶対いけない」などなど私たちは
さまざまな、時には自分独自のドミナント・ストーリーに
縛られて生きています。

他方で、私たちを楽にしてくれるのが、「オルタナティヴ・
ストーリー」です。オルタナティヴとは、主流のものに
代わる別の新しいものという意味です。ここから、オルタ
ナティヴ・ストーリーとは、支配的なストーリーとは別の
もうひとつのストーリー、自分にとって生きやすいストー
リーのことを指します。

繰り返しになりますが、ナラティヴ・セラピーでは、生
きづらさを生んでいるドミナント・ストーリーを、自分に
とって生きやすいオルタナティヴ・ストーリーへと書き換
えていきます。

先ほどの、四人組の例に戻ります。「私の悪口で、盛り
上がってるのかもしれない」という思いが頭に浮かんだま
ま立ちすくんでいると、あなたに気づいたお友達がこちら
を向いて手を振っています。それで行ってみると自分の悪
口なんかじゃ全然なくて、面白い話をしていて一緒になっ
て笑う、なんていう展開もあるわけです。こうした経験を
繰り返しているうちに、「自分のいないところでは、悪口
を言われてるかも」というストーリーは書き換えられてい
きます。友達への信頼感が育っていきます。

私たちは日常的に、さまざまな架空のストーリー、いわ
ば妄想を、現実だと思い込み、必要のない苦しみを生きて
いるものです。そんな私たちの妄想を「それって、妄想だ
よね」とやさしく修正してくれるのは、新しい経験や他者
の存在です。

この私も、教員一年目の最初の頃は、大学生がなんだか
怖かったものです。【3】、実際に目の前に現れるリア

ルな大学生はみんな親切で（私が単位を出す側の人間だということもあるでしょうが）、「若者って、ちよつと怖いかも」なんていうストーリーはあつさり書き換えられたものでした。アフロヘアモコモコ男子もロングネイル大好き女子も世界冷笑絶望系男子も、センチには親切です。どうも。

こんなふうには日常のなかでもストーリーの書き換えはよく起きますが、それを意識的に行うのがナラティブ・セラピーです。

（中村英代『嫌な気持ちになつたら、どうする？ ネガティブとの向き合い方』による。なお、問題文の一部を省略している。）

【注】

- * 専攻——専門的に学んでいる学問の分野。
- * 心理療法——精神的な働きかけで病気などを治療しようとする方法。
- * セラピー——薬や手術などを用いない治療。
- * セラピスト——治療を行う人。
- * クライアント——心理療法を受けに来た人、依頼者。
- * カウンセラー——依頼者の問題・悩みなどに対し、専門的な知識を用いた面談をして援助する人。
- * 崇り——神仏や靈魂などによる災い。
- * 架空——想像によつてつくりあげること。
- * 妄想——根拠もなく想像すること。
- * 単位——進級や卒業のために必要な、科目で一定以上の成績を修めたことを証明するもの。
- * 冷笑——見下して笑うこと。

問一 空欄 、 にあてはまることばを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア あと イ まだ ウ もう エ ようやく

問二 空欄 【 1 】 【 3 】 にあてはまることばを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア でも イ そして ウ たとえば

問三 — 線部 A 「大きな影響を与えてきました」とあるが、どういうことか。説明として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア カウンセラーが話す一つひとつの内容が、クライアントの悩みや問題の解決を促しているということ。
- イ 言葉や対話が現実を創り上げると考える社会構成主義が、心理療法においても応用されたということ。
- ウ 言葉というものが、わたしたちの生活において感じ方や考え方に影響し、行動を変化させているということ。
- エ マイケル・ホワイトとデビット・エプストンによるナラティブ・セラピーが社会構成主義を作るということ。

問四 — 線部 B 「見方が変われば、その現象への反応も変わります」とあるが、どのようなことを言っているのか。説明として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 同じ現象が起こったとしても、感じ方はそれぞれ異なるので、互いの見方を尊重するべきだということ。
- イ 同じ現象が起こったとしても、その人が持っている考えによって、示す感情や態度は異なるということ。
- ウ どのような現象も言葉や対話によって表れるので、表現の仕方によって生じる現実は変わるということ。
- エ どのような現象も良い方向へと与えることができるので、常に前向きな考え方を持つべきだということ。

問五 — 線部 C 「自分にとって生きやすいストーリー」とは何か。本文中から十五字以内で抜き出しなさい。

問六 — 線部 D 「ドミナント・ストーリーに縛られて生きています」とあるが、「ドミナント・ストーリーに縛られて生きている」人とはどのような人か。説明しなさい。

問七 — 線部 E 「日常のなかでもストーリーの書き換えはよく起きますが、それを意識的に行うのがナラティブ・セラピーです」とあるが、意識的に書き換えるとはどうすることか。また、その結果、ストーリーはどのように書き換わるか。説明しなさい。

三

次の①～⑤の――線部のカタカナを漢字にしなさい。

- ① エンドウの観客に手を振る。
- ② エンジたちにお菓子^{かし}を配る。
- ③ 犯人が法によってサバ^{さば}かれた。
- ④ 校則についてトウロン^{とうろん}する。
- ⑤ 身体にフタン^{ふたん}がかかる。

